

# オノマトペの音韻

工藤 真子

## 1 調査の目的

今回の調査では、気仙沼市方言において用いられるオノマトペの清濁対立の実態を明らかにすることを目的とする。

共通語オノマトペにおいては、語基頭の清濁対立による意味の強化が知られている。例えば、「ポキポキ」と「ボキボキ」のようなオノマトペ対では、オノマトペの意味の中心である語基「ポキ」の語基頭が「ボキ」のように濁音になることで、より強い意味を表すようになる。

東北方言で用いられるオノマトペについても同じように清濁対立による意味の強化がみられるが、その実態については、先行研究によって異なる見解が示されている。例えば津軽方言を研究した浜野（2014）では、「津軽方言では、有声音を使うことによって、例えば、「ポキ」<「ボキ」<「ボギ」というように3段階で意味を強めることが可能である」（p.12）と3つの対立が存在するとされる一方、寒河江市方言等について研究した川越（2012）では、「東北方言では「カタカタ」に対する濁音の語は「ガダガダ」となり、第2語基音も濁音化している上、鼻濁音化もしている」（p.43）と、浜野（2014）と異なり「カタ」<「ガダ」の2つの対立であるとしている。また、川越（2012）では第2語基音の発音についても言及しており、「ダ」の子音が鼻濁音で発音されるとある。

こうした語形の対立、ならびに発音の実態はどのようになっているのであろうか。そこで今回の調査では、気仙沼市方言において用いられるオノマトペについて、これらの語形対立と発音の実態を検証する。

## 2 調査の概略

今回の調査に先立ち、2023年8月9日・10日に行った方言調査（工藤ほか2024）では、70代～90代の話者3名に対し、清濁対立のある子音を含むオノマトペ対について調査を行った。その結果、第2語基音がk-gの対立となっているオノマトペ対について、3つの対立が認められる場合があることが分かった<sup>注1</sup>。しかしながら、その発音については、話者3名とも一般語の発音「上げる」については鼻濁音を使用したものの、オノマトペ「どぎどぎ」「びがびが」「がぐがぐ」については鼻濁音の出現は確認できなかった。また、2023年度の調査では話者の人数が3名と少なかったことが起因している影響を排除できなかった。

そこで今回の調査では、世代別多人数に対して調査を行い、より詳細に実態を把握することを試みた。昨年度の調査結果に基づき、3段階の対立が抽出できる可能性が高いと推測されるオノマトペ対「ぴかぴか」「びかびか」「びがびが」を対象とした。調査では雷が光る様子をうつした3種類

の動画 A, B, C を用意し、それぞれの雷の光の様子をオノマトペで回答してもらった<sup>注2</sup>。3 種類の動画 A, B, C は、A<B<C の順に光の程度が強く・激しくなるように設定し、それに応じて、目標語形として A：びかびか、B：びかびか、C：びがびが が出現することを期待した。

話者には、事前にオノマトペという語類について説明し、オノマトペで回答を行うよう求めた。調査では、動画 3 種を一度すべて流した後、1 つの質問につき 1 回ずつ、それぞれの動画を再生し、「このような光の様子をどのように言いますか？」と尋ねた。目標語形が自発的に出現した場合には再度発音を求めた。目標語形が自発的に得られなかった場合には即座に文字カードを提示し当該語形を使用するか否かを尋ね、使用する場合には 2 度発音を求めた。

### 3 調査の結果

#### 3.1. オノマトペの出現率

前述のとおり、動画 A（びかびか）、動画 B（びかびか）、動画 C（びがびが）の各映像を提示し、話者が光の様子をどのようにオノマトペで表現するか調査した。結果の整理に当たっては、目標語形が自発的に出現した場合ならびに文字カード提示で出現した場合を「出現あり」、いずれでも出現しなかった場合を「出現なし」と判定した。

表 1 世代別の目標語形出現

		動画 A	動画 B	動画 C
高年層	出現あり	18 (82%)	5 (23%)	17 (77%)
	自発的に出現	11 (50%)	2 (9%)	14 (64%)
	文字カード提示で出現	7 (32%)	3 (14%)	3 (14%)
	出現なし	4 (18%)	17 (77%)	5 (23%)
	動画 C 以前に「びがびが」が出現	2 (9%)	12 (55%)	0 (0%)
中年層	出現あり	18 (90%)	8 (40%)	20 (100%)
	自発的に出現	15 (75%)	2 (10%)	15 (75%)
	文字カード提示で出現	3 (15%)	6 (30%)	5 (25%)
	出現なし	2 (10%)	12 (60%)	0 (0%)
	動画 C 以前に「びがびが」が出現	1 (5%)	10 (50%)	0 (0%)
若年層	出現あり	19 (90%)	4 (19%)	19 (90%)
	自発的に出現	10 (48%)	2 (10%)	11 (52%)
	文字カード提示で出現	9 (43%)	2 (10%)	8 (38%)
	出現なし	2 (10%)	17 (81%)	2 (10%)
	動画 C 以前に「びがびが」が出現	0 (0%)	11 (52%)	0 (0%)
少年層	出現あり	16 (80%)	11 (55%)	10 (50%)
	自発的に出現	12 (60%)	5 (25%)	4 (20%)
	文字カード提示で出現	4 (20%)	6 (30%)	6 (30%)
	出現なし	4 (20%)	9 (45%)	10 (50%)
	動画 C 以前に「びがびが」が出現	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

それぞれの回答数とその割合を表 1 に、目標語形が出現した場合に焦点を当てた結果を図 1 に整理した。なお後述するように、今回の調査では、動画 C 以外の動画の雷についてもオノマトペ「びがびが」を回答した話者が多かった。その結果を分かりやすく示すため、表 1 中には「動画 C 以前に『びがびが』が出現」という行を設けた。

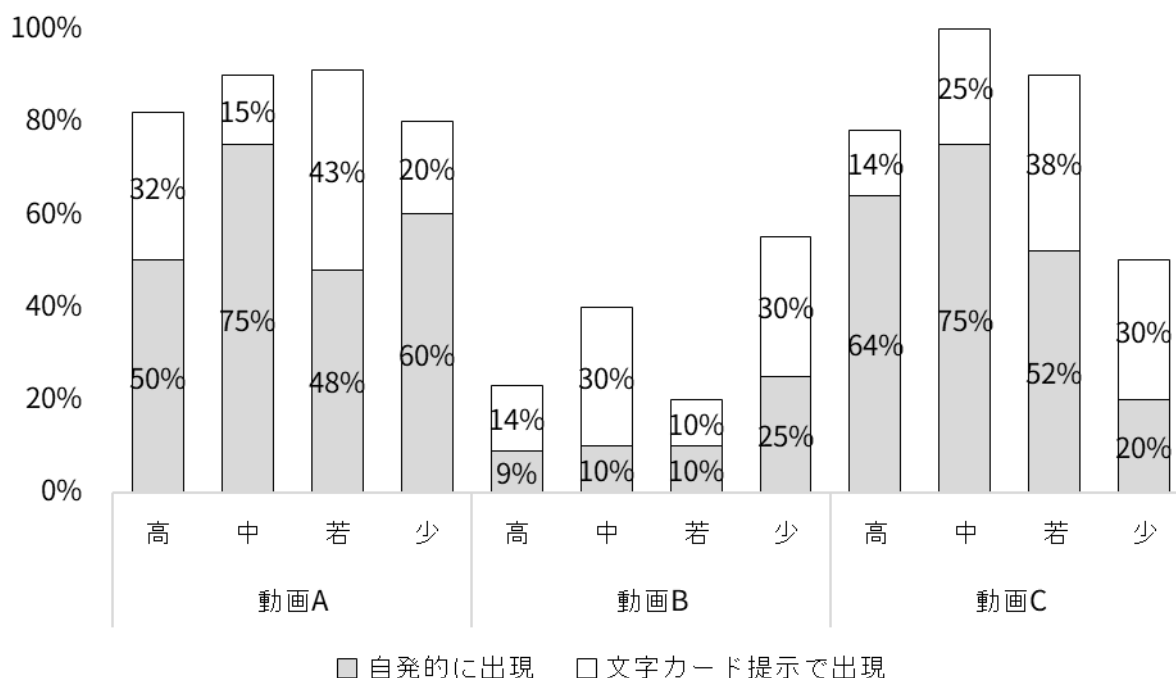


図 1 目標語形の出現率とその内訳

上記の図表から、今回の調査の結果としては、大きく次のような傾向が見られた。

- ① 動画 A・C では目標語形が比較的高い頻度で出現したが、動画 B では出現率が低かった。
- ② 「びがびが」の使用は高年層～若年層で比較的多く見られたが、少年層では減少した。
- ③ 少年層ではいずれの動画においても半数以上目標語形が出現した。
- ④ 「びがびが」が動画 C 以前に出現する話者が一定数いた。
- ⑤ 「びがびが」の自発的な使用率は世代によって異なり、少年層では特に低かった。

以下、それぞれについて詳しく見ていく。

① 動画 A・C では目標語形が比較的高い頻度で出現したが、動画 B では出現率が低かった。

図 1 からは、各動画における目標語形の出現率が把握できる。「自発的に出現」と「文字カード提示で出現」を合わせると、動画 A (びかびか) ではいずれの世代も 80%以上、動画 C (びがびが) では高年層～若年層で 78～100%、少年層で 50%目標語形が得られたのに対し、動画 B (びかびか) では高年層～若年層で 20%～40%程度、少年層で 50%と、特に高年層～若年層で動画 A・C に比べ

目標語形が得られた割合が低くなっていることが分かる。このことから、特に高年層～若年層の話者にとって「びかびか」が馴染みのある語形ではなく、雷の光の様子を表すオノマトペとして「びかびか」「びがびが」の二項対立が主に認識されていたものと推察される。

② 「びがびが」の使用は高年層～若年層で比較的多く見られたが、少年層では減少した。

①でも述べたとおり、動画 C（びがびが）では高年層～若年層で 78～100%と非常に高い割合で目標語形が得られたのに対し、少年層では 50%とその出現が半数にとどまった。

③ 少年層ではいずれの動画においても半数以上目標語形が出現した。

ここで少年層の割合に注目して図 1 を見ると、動画 A（びかびか）で 80%、動画 B（びかびか）で 50%、動画 C（びがびが）で 50%目標語形が出現していることが読み取れる。動画 A では高年層～若年層と同程度の高い割合で目標語形が出現したが、動画 B・C では目標語形が出現するか否かは半々であると読み取れる。しかしながらいずれの動画においても半数以上は目標語形が出現しているとも読み取れ、少年層においては雷の光の様子を 3 段階の対立ととらえている話者が一定程度存在することが分かる。

ただし、もう半数の話者にとっては、雷の光の様子は「びかびか」系列で表わされるものという認識は薄いものと推察される。実際に、少年層においては動画 B・C の第一回答として「ごろごろ」（6名）、「ぎらぎら」（5名）、「びりびり」（4名）が回答されており、雷の光の様子は多様なオノマトペで表わされていた。

④ 「びがびが」が動画 C 以前に出現する話者が一定数いた。

①で動画 B（びかびか）の目標語形出現率が低いことを述べたが、表 1 の「動画 C 以前に『びがびが』が出現」行を見ると、その理由の一つが明らかになる。その割合は高年層では 55%、中年層では 50%、若年層では 52%と、高年層～若年層の約半数が動画 B の雷について「びがびが」を使うと回答したことが分かる。言い換えると、高年層～若年層では動画 B・C の雷の光の様子を表す際に、同じオノマトペ「びがびが」をもって表す話者が約半数いるということになる。これは、①で述べた雷の光の様子を表すオノマトペが二項対立であるとの推察を補強する。

さらに動画 A においても「びがびが」を使うと回答した話者が高年層で 2 名、中年層で 1 名おり、これらの話者は動画 A・B・C すべての段階において同じオノマトペ「びがびが」をもって表す。このような話者は少数派であるが、気仙沼市方言において雷の光の様子を表すオノマトペとして「びがびが」が根付いていることを裏付ける。

ここで注目されるのが、「びかびか」の文字カード提示によって「びがびが」を発音した話者が多数見られたことである。この結果は、話者が「びかびか」という語形を認識しながらも、実際の発音において「びがびが」を選択した可能性があることを示している。この現象は、東北方言の清濁対立のあり方と関連する可能性がある。川越（2012）では以下のように、東北方言において「カタ

カタ」に対する濁音形が「ガタガタ」ではなく「ガダガダ」であることを述べるが、今回の調査結果は、上述のとおり、話者によっては「びかびか」カードに対応する語形として「びがびが」を用いていたケースもあることから、話者にとって「カタカタ」に対する濁音形が「ガタガタ」である可能性も存在していると言える。

通常東北方言の多くでは、「旗 (hata)」と「肌 (hada)」を区別する際、2 拍目の音について「旗」は「hada」と発音し濁音となるが、「肌」は「handa」などのように鼻濁音化して区別する。これを共通語の清濁対立と照らし合わせれば、「カタカタ」を濁音化するだけでは第 2 語基音は鼻濁音化しない。つまり、「カタカタ」に対する濁音形は、もとより「ガダガダ」という全体が濁音化した形なのであり、「ガダガダ」の第 2 語基音は鼻濁音によって発音されるのが普通である。(p.43)

この詳細については今回の調査データの音声を詳しく分析する必要があるが、第 2 語基音の分析によって、一般語における有声化・鼻音化現象との関わりを明らかにできる可能性がある。

⑤ 「びがびが」の自発的な使用率は世代によって異なり、少年層では特に低かった。

このように雷の光の様子を表すオノマトペとして好んで用いられるオノマトペ「びがびが」の出現について、「自発的に出現」と「文字カード提示で出現」の割合に注目すると、ある世代差が読み取れる。図 1 の「動画 C」に着目すると、高年層で 64%、中年層で 75%が自発的に出現しているが、若年層では 52%と自発的に出現する割合は約半数にとどまった。そして、少年層では自発的に出現する割合は 20%と非常に低い割合となっている。

さらに、「自発的に出現」と「文字カード提示で出現」の割合は、高年層・中年層では「自発的に出現」が全体の高い割合を占めるが、若年層では「文字カード提示で出現」が 38%と「自発的に出現」の 52%に肉薄し、少年層では「文字カード提示で出現」のほうが多くなっていることが分かる。

「文字カード提示で出現」が多いことは、オノマトペ「びがびが」が理解語彙もしくは使用語彙ではあるが、日常でよく用いる語彙ではない話者が多いことを示唆する。実際に、少年層の話者では 2 名から「『びがびが』は母親が言う」「『びがびが』はおばあちゃんとか年が上の人が使っているイメージ」という回答があり、伝統的な気仙沼市方言においては「びがびが」が使用されていたものの、共通語化に伴い「びがびが」の使用は衰退しているものと推察される。

①～⑤の結果からは、川越 (2012) の「2 対立」モデルが高年層～若年層に広くみられることが明らかになる。しかしながら、高年層・中年層においてはその対立が顕著であるものの、若年層～少年層にかけては「びがびが」が徐々に衰退し、共通語の「びかびか」の流入によって浜野 (2014) の「3 対立」モデルを有する話者が増加、少年層においては半数程度が雷の光の様子を 3 つの対立と認識していることが明らかになった。しかしながら、少年層のもう半数は「びかびか」系列にこ

変わらず光の様子を様々なオノマトペで表しており、雷の光の様子については、徐々に清濁対立にとらわれない様々な形式を用いた表わし分けがなされるように変化していることが明らかになった。

#### 4 本調査の手法

ところで今回の調査では、2節で述べたように、調査手法として動画提示による方法を採用した。これは、オノマトペが自発的に出現する可能性の高い手法を用いることを目的としたものである。

本調査に先立って行った 2023 年調査（工藤ほか 2024）では、オノマトペを求める方法として、一般語彙の調査と同様に「なぞなぞ式」を用いた。例えば、オノマトペ「べたべた」については、「汗で衣服が体にはりつく様子を、どのように表しますか」というなぞなぞを用意した。そして、なかなか目標語形が出現しなかった場合には語形カードを使用して読み上げてもら方法をとった。

しかしながら、この方法では、オノマトペが自発的に出現しないケースが相当数みられ、また自発的に出現した場合でも、回答までに時間を要することが多かった。そのため、調査時間に厳密な制約がある今回の調査には「なぞなぞ式」の手法は適さないと判断し、より即時的な反応が得られる方法として動画提示法を導入するに至った。

動画提示調査は、画像提示調査と比べて話者に喚起されるイメージを高い精度で統制でき、また動画が時間的展開を持つため、反復語形が出現しやすいという特長がある。こうした点から、目標語形がより即座に回答される可能性があると考えた。

実際の調査においても、図 1 から読み取れるとおり、動画 A および動画 C では文字カードを提示せずとも自発的に行った話者が相当程度おり、また、結果的に文字カード提示によって回答を得られた場合も多数存在した。これらのことから、動画提示調査には一定の有効性があると考えられ、今後のオノマトペ調査においても有効な手法の一つとして活用できる可能性がある。

#### 5 まとめと今後の課題

本調査では、気仙沼市方言におけるオノマトペの清濁対立の実態を分析し、世代間の違いを検討した。その結果、以下の点が明らかになった。

- ・ 高年層～若年層の話者の多くにとって「びかびか」は馴染みのある語形ではなく、雷の光の様子を表すオノマトペとしては「びかびか」「びがびが」の 2 つの対立が主に認識されていた。
- ・ 「びかびか」「びかびか」「びがびが」の 3 つの対立を持つ話者も存在し、特に少年層においては雷の光の様子を 3 段階の対立ととらえている話者が半数程度存在した。
- ・ 少年層では高年層～若年層と比較し「びがびが」の使用が衰退していた。一方で、「びかびか」系列にこだわらず光の様子を様々なオノマトペで表す話者が多数みられた。

今回の調査では、雷の光の様子を表すオノマトペ「びかびか」「びかびか」「びがびが」のみを対象としたが、今後はこれらに限らず、同様の清濁対立を含む他の子音系列のオノマトペ対について

も調査を広げていくことが期待される。

また、4 節に述べたとおり、今回の調査では映像刺激を用いてオノマトペの回答を促す方法を採用したが、話者が語形を選ぶ際には、雷の光の強さだけでなく、稲光の継続時間や明滅の回数、視覚的印象など、複数の要因が影響する。したがって、今後の調査では目標語形をよりの確に引き出すために、それぞれの語形にふさわしい映像内容を精密に設計・統制する必要がある。特に、稲光の強度や回数、持続時間などを細かく調整した動画を作成することで、各語形と刺激との対応関係をより明確に把握できると考えられる。

## 注

- 1 第 2 語基音が t-d の対立となっているオノマトペ対についても 3 つの対立が認められたが、これらのオノマトペならびに同時に調査した一般語「井戸」の発音においては鼻音を伴う回答が認められなかったため、今回の調査の目的に照らして、対象から除外した。
- 2 調査の都合上、2 名の話者（中年層 1 名、若年層 1 名）に対しては動画ではなく画像を用いた調査を行った。いずれも目標語形が複数得られたため、本稿の分析対象に含めた。

## 文 献

川越めぐみ（2012）「東北方言オノマトペの形態と意味」東北大学博士論文

工藤真子・楊博葳・大久保泰斗・日野太木（2024）「オノマトペの音韻対応」『文化庁委託事業報告書 東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 2』、東北大学方言研究センター、5、pp.8-19

浜野祥子（2014）『日本語のオノマトペー音象徴と構造ー』くろしお出版

# 「べ」の接続と用法

田附 敏尚

## 1 調査の目的

動詞の終止・連体形活用語尾「ル」“(r)u”に助動詞「べ」が接続するとき、「ル」が促音便化や撥音便化を起こすことがある。この音便は、動詞のテ形などのように規則的に起こるものではなく、音便化するとしても地域によってどの音便となるかは異なる。

そのような中、陸羽東線沿線地域の調査では、1 地点に複数の音便形があり、かつ現れる語形（促音便形／撥音便形／非音便形）が「べ」の意味・用法によって異なる地域があった（田附 2011）。また、三陸地方南部の過去の調査では一段動詞の〈意志〉は語幹に直接接続する形となるという報告もある（佐藤・加藤 1972）。そこで、気仙沼においてそのようなことがないのか、そこに世代差はないのかを確認したい。

目的Ⅰ：「べ」が動詞のル語尾に接続する際、意味・用法によって語形の使い分けはないのか、そこに世代差は存在しないのかを確認する。

もう一点、経年的な変化にも着目したい。『方言文法全国地図』3-106 図～114 図（意志形と推量形の項目）を見ると、気仙沼では促音便形、撥音便形ともに回答されていることがわかる。しかし、2006 年の調査（田附 2012）では高年層のほうが撥音便形を許容しやすく世代が下るにつれ減少していく傾向が表れており、さらに談話資料からの調査（田附 2019）でも高年層において促音便形が優勢であることがわかっている。つまり、撥音便形が減少し、促音便形へ収束する傾向が看取されているが、この傾向が進行しているのかを確かめる。その中で、2006 年の調査との比較において、各年層（コーホート）の実時間の変化の有無も確認したい。

目的Ⅱ：「べ」が動詞のル語尾に接続する際、どのような語形となるのかについて、2006 年の調査結果との比較を行う。

## 2 調査の概略

本調査はアンケート形式で行った。調査項目は以下のとおりである。

1. 「一緒に帰ろう」と言うとき、「帰ろう」の部分は何と言いますか。



2. 独り言で「(時間が遅いから) もう寝よう」とつぶやくとき、「寝よう」の部分は何と言いますか。
3. 友達と旅行にきています。明日も早朝から移動があるので、友達に「もう寝よう」と言うとき、「寝よう」の部分は何と言いますか。
4. 友達と太郎の話をしています。友達に「太郎は早寝早起きだからおそらく9時には寝るだろう」と言うとき、「寝るだろう」の部分は何と言いますか。
5. 太郎に対して「あなたは早寝早起きだから9時には寝るだろ(でしょ)?」と確認するとき、「寝るだろ?」あるいは「寝るでしょ?」の部分は何と言いますか。
6. お祭りがあり、来てみたらとても楽しいと感じました。独り言で「来年もまた来よう」とつぶやくとき、「来よう」の部分は何と言いますか。
7. お祭りがあり、友達と来てみたらとても楽しいと感じました。友達に「来年もまた一緒に来よう」と言って誘うとき、「来よう」の部分は何と言いますか。
8. お祭りがあり、その会場で太郎と会いました。太郎はとても祭りを楽しんでいる様子です。それを見て、一緒に来ている友達に「あの様子だと、太郎は来年も来るだろうなあ」と言うとき、「来るだろう」の部分は何と言いますか。
9. 2日間開催されている祭りがあり、その初日に会場で太郎と会いました。あなたは太郎に渡すものがあつたことに気づき、明日渡そうと思いました。そこで、「明日も来るだろ(でしょ)?」と太郎に確認するとき、「来るだろ?」あるいは「来るでしょ?」の部分は何と言いますか。

1は「帰る」という動詞について、勧誘の用法を調査した。これは2006年調査との比較のために、2006年と同じ調査項目、調査文としている(なお、2006年の調査もアンケート調査で行っている)。残りの2から5は「寝る」、6から9は「来る」という動詞について、それぞれ意志(2,6)、勧誘(3,7)、推量(4,8)、確認要求<sup>注1</sup>(5,9)の用法を調査している。

回答は選択式で、複数回答を認めた。選択肢は、「寝る」を例にとると、ネッペ(促音便形)、ネンベ(撥音便形)、ネルベ(非音便形)、ネベ(語幹接続形)、ネベー(語幹接続べ長音形)、ネヨー(意志形)、ネッカ(疑問形)とし、その他として形式を自由記述できる欄も設けた。さらに「来る」に関しては、「ベ」に接続する際、語幹が「ク」ではなく「コ」の可能性もあるため、それぞれについて「コ」が語幹の選択肢も用意した(ただし、結果として語幹「コ」は選択されなかった)。

調査対象者は気仙沼市出身の生え抜き話者83名であり、そのうち71名から回答を得た。年齢の内訳は高年層(60代以上)21名、中年層(40~50代)19名、若年層(20~30代)19名、少年層(10代)12名である。

### 3 調査の結果

以下、目的Ⅰに関する結果を結果Ⅰで、目的Ⅱに関する結果を結果Ⅱで記す。

### 3.1 結果 I

意味・用法によって複数ある語形—促音便形、撥音便形、非音便形—を使い分けることはあるのだろうか。今回調査した結果を以下のグラフに示す。

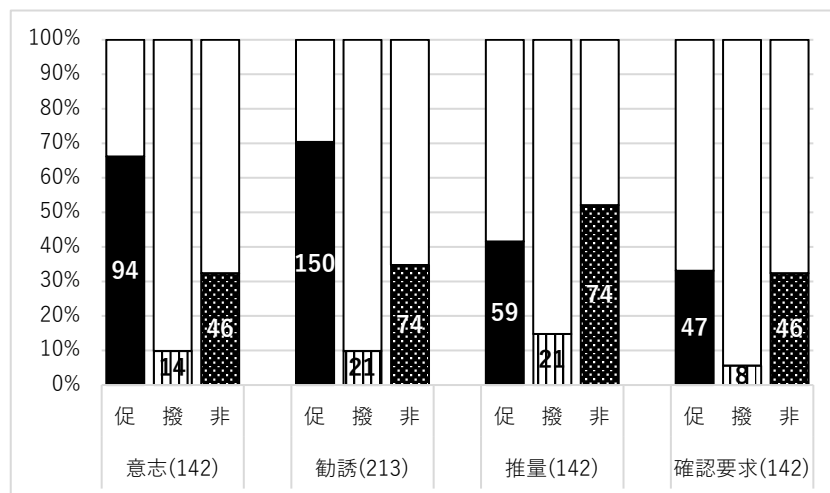


図 1 各用法における各語形の出現数

このグラフは、意志、勧誘、推量、確認要求の用法ごとに、促音便形、撥音便形、非音便形のそれぞれの語形がどれだけ出現したかを示したものである。各用法名の後ろの括弧内の数値は各棒グラフそれぞれの最大値である。回答者数が 71 名であり、意志、推量、確認要求はそれぞれ「寝る」「来る」の 2 項目ずつあるため、回答者数の 2 倍の 142 が最大値、勧誘は調査項目 1「帰る」も含め 3 項目あるため、3 倍の 213 が最大値となる。これを 100%として積み上げ棒グラフで表示し、各語形の出現数を棒グラフ内に示した（複数回答があり得るため、用法の数値の合計が最大値（= 100%）となるわけではないことに注意されたい）。

「べ」の接続に関係する語形としては、他に語幹接続形と語幹接続べ長音形があるが、これらはどの用法とも出現数が 0~2 程度であり、ほぼ現れないと言ってよい程度なので、グラフからは割愛した。1 節で述べたように、佐藤・加藤（1972）では意志の表現としてこの語幹接続形が使われているという記述があったが、今回の調査で気仙沼ではすでにその形はほぼ使用されていないことが確認された。

また、これらほどではないものの、撥音便形もかなり出現数が低かったことが図 1 から見て取れる。これに関して、特に勧誘の用法については次節でも触れるが、勧誘のみならず、どの用法においても出現数が低い状況は同じだと言える。

さて、用法間に差がなければ各用法のグラフの形は同じようなものになるはずだが、図 1 はそのようにはなっていない。すなわち、用法によって語形の使い分けがありそうだというのが、目的 I に対する答えの一つである。意志、勧誘は似たような傾向を示し、促音便形が 6 割後半から 7 割と多数を占めている一方で、推量は促音便形の数値が 4 割程度と低く、意志や勧誘では 3 割程度だった非音便形が 5 割と高くなっている。そして、確認要求では促音便形も非音便形も 3 割程度と、低

い値にとどまっている。確認要求では、これ以外でも突出して高い値を取る語形は存在せず、疑問形のほか、自由記述で「ツチャ」（例：ネルツチャ）「デショ」（例：ネンデショ？）「ヨネ」（例：ネルヨネ）「コテ」（例：ネッコテ）など、「べ」への接続以外にもさまざまな語形が見られた。各用法における優勢な語形をまとめると、（１）のようになる。

（１）各用法における優勢な語形

意志、勧誘 …… 促音便形 / 推量 …… 非音便形 / 確認要求 …… 優勢なし

ではこの傾向に世代差はあるのだろうか。これを示したのが図２～５である。これらのグラフは、意志、勧誘、推量、確認要求の用法ごとに、促音便形、撥音便形、非音便形のそれぞれの語形がどれだけ出現したかを世代に分けて示したものである。回答者数は高年層 21 名、中年層 19 名、若年層 19 名、少年層 12 名であり、意志、推量、確認要求はそれぞれ「寝る」「来る」の 2 項目ずつあってその出現数を合計しているため、各世代で回答者数の 2 倍の数値がグラフの最大値となる。勧誘は調査項目 1「帰る」も含め 3 項目あるため、3 倍の数値が最大値となる。グラフの中では世代の下の括弧内にそれぞれの最大値を記しておいた。これを 100%として積み上げ棒グラフで表示し、出現数を棒グラフ内の数字で示した。

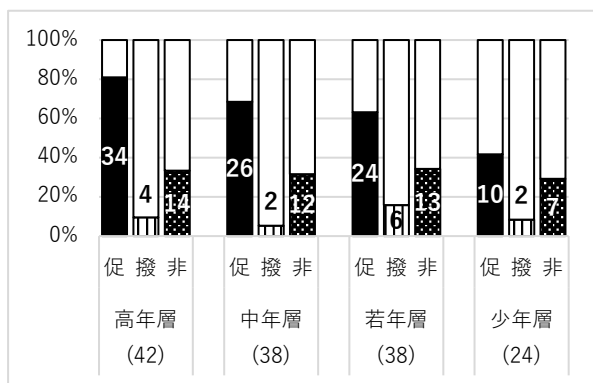


図 2 2024 年調査結果\_世代差\_意志 (音便)

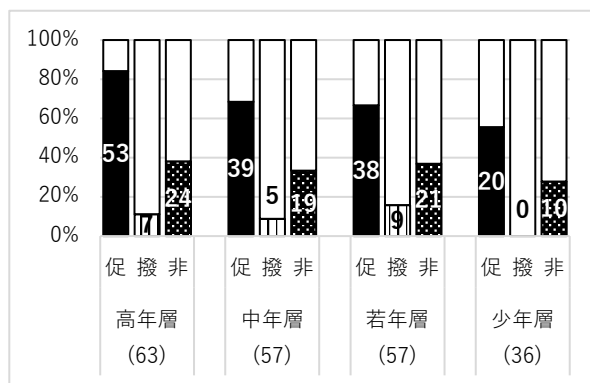


図 3 2024 年調査結果\_世代差\_勧誘 (音便)

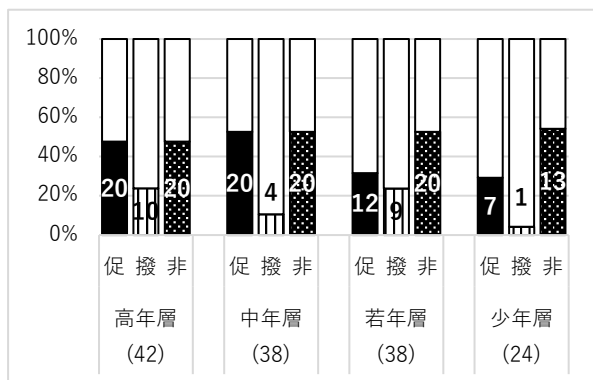


図 4 2024 年調査結果\_世代差\_推量 (音便)

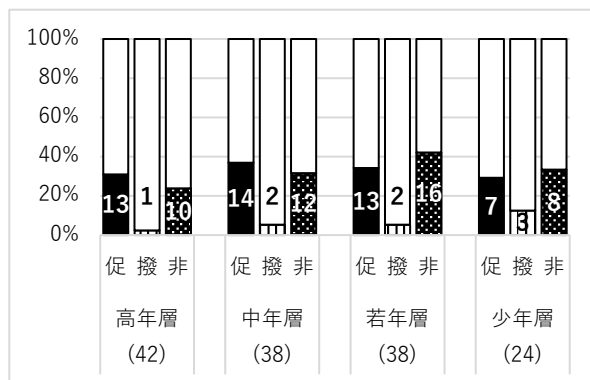


図 5 2024 年調査結果\_世代差\_確認要求 (音便)

意志や勧誘で多かった促音便形だが、図 2 と図 3 を見ると、実はこれらも若い世代に向けて減少傾向にあることがわかる。推量は非音便形が優勢であったが、図 4 を見ると、中・高年層では促音便形と非音便形に差はない。しかし少・若年層において促音便形が減少し、非音便形が維持あるいは微増と捉えられるような値を取っているため、全体として促音便形よりも優勢となっているのである。この状況から、推量は非音便形に一本化していくことが予想される。「べ」への接続に関して優勢な語形がない確認要求は、図 5 から、その状況はいずれの世代でも同じであることがわかる。

なお、意志と勧誘の用法においては、意志形「ネヨー」「コヨー」と疑問形「ネッカ」「クッカ」も多数選択されていた。これらをグラフ化すると、図 6、7 のようになる。これらから意志形のみを拾って見ていくと、意志、勧誘どちらの用法においても意志形の使用が若い世代に向けて増加しているのがわかる。一方で、これらから疑問形のみを拾って見ていくと、今度は意志、勧誘どちらの用法においても若い世代に向けて減少している様子がうかがえる。意志形が、減少傾向にある疑問形や「べ」の促音便形に取って代わって用いられ始めていると見られ、これは、共通語化を示す例と捉えることができよう。

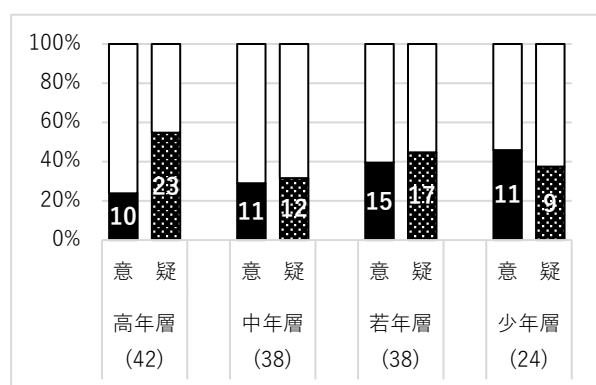


図 6 2024年調査結果\_世代差\_意志  
(意志形・疑問形)

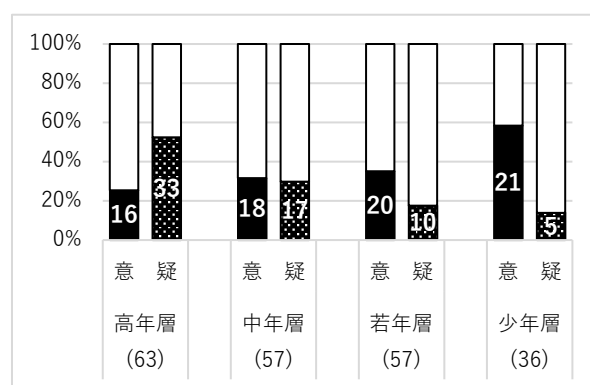


図 7 2024年調査結果\_世代差\_勧誘  
(意志形・疑問形)

以上、世代差について結果をまとめると、(2) のようになる。

## (2) 世代差

- 意志、勧誘は若い世代に向けて促音便形、疑問形が減少、意志形が増加。
- 推量も若い世代に向けて促音便形が減少傾向、非音便形が維持あるいは微増。
- 確認要求は全世代でどの語形も高い値を見せない。

## 3.2 結果Ⅱ

ここでは、「帰る」の勧誘用法の調査結果を、2006年の調査結果と比較する。

調査の設定自体は 2 節で述べたような年齢層で行っているが、比較のために 2006 年調査時の同一生年集団として分けなおすと、表 1 のようになる。表 1 は 2006 年当時の世代と対象人数を中央

の 2 列に示し、その生年区分を左側に、その生年区分に対応する 2024 年調査の対象人数を右側に記している。2006 年の高年層にあたる生年の人数は、今回は 5 名しかいないため、この区分の比較は参考程度となる。

さて、このように分けただけで、調査項目 1 の調査結果を 2006 年の結果と比較できるように示すと表 2 のようになる。

表 1 コーホートの区分と人数

生年区分	2006年時点の世代	2006年対象人数	2024年対象人数
1927-1946年生	高年層	21	5
1947-1966年生	中年層	15	20
1967-1986年生	若年層	14	22
1987-2006年生	少年層	15	13
2007-2009年生	—	—	11

表 2 2006 年・2024 年 項目 1 調査結果

生年区分	<促音便形>カエツペ(%)		<撥音便形>カエンベ(%)		<非音便形>カエルベ(%)		<意志形>カエロー(%)		対象人数	
	2006	2024	2006	2024	2006	2024	2006	2024	2006	2024
1927-1946	19 (90.5%)	5 (100%)	13 (61.9%)	1 (20.0%)	12 (57.1%)	1 (20.0%)	11 (52.4%)	2 (40.0%)	21名	5名
1947-1966	13 (86.7%)	17 (85.0%)	6 (40.0%)	2 (10.0%)	8 (53.3%)	7 (35.0%)	9 (60.0%)	6 (30.0%)	15名	20名
1967-1986	14 (100%)	17 (77.3%)	4 (28.6%)	2 (9.1%)	6 (42.9%)	6 (27.3%)	6 (42.9%)	5 (22.7%)	14名	22名
1987-2006	15 (100%)	11 (84.6%)	2 (13.3%)	4 (30.8%)	8 (53.3%)	8 (61.5%)	7 (46.7%)	4 (30.8%)	15名	13名
計	61 (93.8%)	50 (83.3%)	25 (38.5%)	9 (15.0%)	34 (52.3%)	22 (36.7%)	33 (50.8%)	17 (28.3%)	65名	60名
2007-2009		7 (63.6%)		0 (0%)		3 (27.3%)		7 (63.6%)		11名
総計		57 (80.3%)		9 (12.7%)		25 (35.2%)		24 (33.8%)		71名

この表は同一生年集団で分けているため、例えば 1947-1966 年に生まれたインフォーマントは 2006 年時点では 40～59 歳だが、2024 年時点では 58～77 歳となっている。つまり、2006 年と 2024 年の比較によって、ここから同じ地域の同じ生年の人々が、18 年間で言語使用を変えたかどうか分かる。

各世代の母数がそれほど大きくはないため、誤差も考慮しなければならないが、それにしても興味深いのは、撥音便形である。2006 年調査では若い世代に向けて使用が減少していたが、2024 年調査では、全体的に使用が少なくなっているのがわかる。例えば 1947-1966 年生まれの層（2006 年調査の中年層）は、40%が使用すると回答していたが、2024 年では 10%と、30 ポイントも減少している。この世代が 18 年間でそれだけ撥音便形を使用しなくなった（厳密には、使用意識が変化した）ということである。1987-2006 年生まれの層の割合は上昇しているが、実際の数の差は 2 であり、全世代的に使用されなくなっていると言えるだろう。撥音便形に関しては、2006 年調査の結果から予測されるよりも一すなわち、見かけの時間での予測よりも一、はやいスピードで使用されなくなっていると思われる。

2007-2009 年生まれ以外の、実時間の比較ができる世代の値を見ると、2006 年よりも 2024 年の調査結果のほうが全体的に値が下がっている。表に示したものの以外の回答はなかったため、2006 年よりも複数回答が少なかったと考えられるのだが、相対的に見るとその減り幅が他よりも小さい促音便形が残り、撥音便形や意志形など他の語形の使用されなくなっているように見える。つま

り、2006年時点ではさまざまな形が使えていたものが、2024年では促音便形に収斂していく段階に入っているとみることができる。

ただ、そうは言っても、2007-2009年生まれの世代の値や3.1節の図1~7を併せて考えると、勧誘全体では促音便形も減少傾向にあり、意志形が増加傾向にある。すぐにまた異なった段階へと移行する可能性が高いため、今後の動態を注視する必要がある。

本節の結果をまとめると、(3)のようになる。

### (3) 2006年との比較

- a. 撥音便形は、2006年調査では若い世代に向けて使用が減少していたが、2024年調査では、全体的に使用されていない。これは、2006年調査で撥音便形を使うと回答した世代も、18年間で使用しなくなった（使用意識が変化した）ことを意味し、2006年の調査結果から予測されるよりはやいスピードで撥音便形が減少していると見られる。
- b. 2006年よりも2024年のほうが複数回答が減少しており、相対的には促音便形が残り、他の語形が使用されなくなっている。ただし、前節の結果なども踏まえると、全体的には促音便形も減少傾向にあり、意志形が増加傾向にある。

## 4 まとめと課題

今回の目的Ⅰに対する結論は3.1節(1)(2)、目的Ⅱに対する結論は3.2節(3)で述べた。紙幅の都合上、まとめ直すのは割愛するが、すべてにおいて何故そのような結果となったのかという考察は今後必要となる。そこで、ここでは特に(1)(2)について、考察のための予備的な整理を行い、本稿の終わりとしたい。

まず音便という形態の面についてだが、撥音便形から促音便形へ、あるいはその先の非音便形へという流れは、井上(1984)や半沢(1999)などに記述があり、ここでも同様のことが起こっていると解釈すればよいだろう。しかし、そこに意味・用法の偏りがあることへの考察を行っている先行研究は、管見の限り見当たらない。

表3 「べ」の用法の枠組み

次に意味・用法の面から見てみよう。意志、勧誘、推量、確認要求は、意味的な分類と、聞き手目当て性によって、表3のような枠組みで捉えることができる。促音便形が意志、勧誘で多く用いられるということは、すなわち意志系用法に偏って用いられているということの意味する。また、促音便形が衰退していく中、非音便形だけが推量で残るということは、聞き手目当て性がない用法に「べ」が収束するということである<sup>注2</sup>。

	聞き手目当て性 なし	聞き手目当て性 あり
意志系用法	意志	勧誘
推量系用法	推量	確認要求

しかし、これらは先行研究の見立てとは異なる。小林(2010)は、「ベシ」が「べ」へ変化するにあたり、意味の比重を「意志・推量」から「勧誘・確認要求」へと移しており、聞き手目当てに変わりつつあると述べる。また白岩(2011)もいくつかの推量形式を調査したうえで、やはり推量か

ら確認要求へ意味の比重が移るという流れを示している。しかし、今回の結果では意志と勧誘の違いは見出せなかったし、形式として残りそうな非音便形は確認要求ではなく推量に偏る。

先行研究との整合性を保ちつつ、どのような説明が可能となるのか、様々な角度から考える必要がある。今後の課題としたい。

## 注

- 1 今回「確認要求」としたものは、三宅（2010）などで「命題確認の要求」とされているものである。「知識確認の要求」については調べることができていない。
- 2 ただし、例文は友達に対して自分の推量したことを述べるというものである。推量自体に聞き手目当て性はなくとも、文脈によって聞き手目当て性が読み込まれる可能性がある。このあたりも、独り言の場面を設けるなど、詳細な調査が必要である。

## 文 献

- 井上史雄（1984）「現代東日本のペイの分布と変化」『東京外国語大学論集』34, pp.75-89
- 小林隆（2010）「日本語方言の形成過程と言語接触—東日本方言における“受け手の論理”—」『日本語学』29-14, 明治書院, pp.32-44
- 佐藤喜代治・加藤正信（1972）「三陸地方南部の言語調査報告」東北大学日本文化研究所編『日本文化研究所研究報告 別巻』8・9（井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編『日本列島方言叢書 3 東北方言考 2 岩手県・宮城県・福島県』ゆまに書房, pp.116-166 所収）
- 白岩広行（2011）「方言の推量形式における意味変化 —談話的機能へ—」『阪大日本語研究』23, pp.57-77
- 竹田晃子（2019）「推量・意志・勧誘・命令表現の形式」東北大学方言研究センター編『生活を伝える方言会話 [分析編] —宮城県気仙沼市・名取市方言—』ひつじ書房, pp.113-125
- 田附敏尚（2011）「「べ」の接続と用法」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室, pp.106-117
- 田附敏尚（2012）「動詞の活用」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室, pp.44-58
- 田附敏尚（2019）「動詞におけるラ行音の撥音化・促音化現象」東北大学方言研究センター編『生活を伝える方言会話 [分析編] —宮城県気仙沼市・名取市方言—』ひつじ書房, pp.3-23
- 半沢康（1999）「東北地方の地域方言と社会方言」『日本語学』18-13, 明治書院, pp.176-184
- 三宅知宏（2010）「「推量」と「確認要求」—“ダロウ”をめぐって—」『鶴見大学紀要 第1部, 日本語・日本文学編』47, pp.9-55